

ミサの中で使われる聖具は様々ありますが、その中で、チボリウムとカリスは特に重要な物です。典
 礼に使われる物は当然、慎重に扱われますが、この二つの物はもっと注意を払って扱うことが求められ
 ます。チボリウムにはパンが入れられ、カリスにはぶどう酒と水が注がれますが、それらはミサの中で司
 祭の口を通して唱えられるイエス様の御言葉によって、イエス様ご自身の御体と御血になります。ですか
 ら、この二つの物は割れやすいものではなく、堅くて丈夫な材料で作られ、更に、その内側は必ずメッ
 キし、特に、カリスの場合は金でメッキします。ミサにおいて、無くてはならないキリストの御体と御血
 を入れる物ですので、その御体と御血が変わらないようにする為、そのように作りますが、他の意味もあ
 ると思います。それはとこしえに変わることのない神様の慈しみとキリストの愛を、司祭を始め、信者の
 皆さんも変わらない心で受け入れるということです。今日はその変わらない心とはどういうことかにつ
 いて、信者の皆さんと共に黙想したいと思います。

今日の第1朗読で、ダビデ王は神様の神殿を建てる計画を預言者ナタンに語りました。ダビデは神様に
 よって選ばれてイスラエルの王となりましたが、彼の実際の仕事は「牧場の羊の群れの後ろ」で、その
 群れを見守る羊飼いでした。そんな卑しい羊飼いであったダビデでしたが、彼の信仰はイスラエルの民の
 誰と比べても優れていました。その信仰はペリシテ人の戦士ゴリアトとの戦いの場面でよく見られますが、
 その時ダビデはただの小さい少年でした。しかし、ダビデは自分よりはるかに大きくて怖かったゴリアト
 の前で、「お前は剣や槍や投げ槍でわたしに向かって来るが、私はお前が挑戦したイスラエルの戦列の
 神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう。主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされないことを、こ
 こに集まったすべての者は知るだろう。」と叫びました。それがダビデの信仰で、神様はその信仰を見て、
 ゴリアトとの戦いは勿論、他の戦争でも彼と共におられ、彼が勝利を取められるようにしてくださいまし
 た。こうして、ダビデはイスラエルの民に平和をもたらしてくれましたが、それは全て、彼の信仰を認め
 られた神様の力によって成されたものでした。今日の第1朗読の中で、神様はご自分の神殿の建築を考

えていたダビデを始め、彼の子孫やイスラエルの民全体を祝福していただきましたが、預言者ナタンよげんしゃの口くちを通して語られた真まことのメッセージは、神様かみさまに向かう変わらない信仰心しんこうしんの大事だいじさだったのです。その信仰心しんこうしんとは、自分じぶんをへりくだって、神様かみさまに全てを任せまかせる心こころ、また、神様かみさまだけに従したが順じゆんとなつて従したがう心こころで、それこそが、神様かみさまが気きに入いられる真まことの神しん殿でんに違ちがいありません。

今日の福音は天使ガブリエルとマリアとの出会いについて語っています。神様かみさまから遣つかわされた天使ガブリエルはヨセフのいいなずけであるマリアのところに來て、イエス様イエスさまの誕生たんじょうのこゝろを知らせました。その知らせは「おめでとう、恵めぐまれた方かた。主しゆがあなたと共ともにおられる。」という祝福しゆくふくの言葉ことばで始まりましたが、それからの言葉ことばはマリアにとっては驚おどろくべき話はなしでした。それはまだ結婚けっこんしていなかつたマリアが身籠みごもつて、男おとこの子こを産うむということでした。そこで、マリアはどうして自分じぶんにそのようなことが起おこり得うるのかについて尋ねましたが、ガブリエルは、「聖霊せいれいがあなたに降おり、いと高たかき方がたの力ちからがあなたを包つつむ。」と言いい、更さらに、不妊ふにんの女おんなであったエリサベトが懐妊かいにんしていることも知らせ、マリアが信しんじるようにはからいました。そのガブリエルによって知らされたイエス様イエスさまは、「いと高たかき方かたの子こ、ダビデの王座おうぎを受け継つぐ方かた、永遠えいえんにヤコブの家いえを治おさめる方かた、また、聖せいなる方かたで、神様かみさまの子こ」でした。このすべての知らせを全身全霊ぜんしんぜんれいで受けとめたマリアは、「私わたしは主しゆのはしためです。お言葉ことばどおり、この身みに成なりますように。」と答こたえ、神様かみの救すくいの計けい画かくを素直すなおに受け入うれました。イエス様イエスさまはマリアのその純じゆん粋すいな心こころ、従じゆう順じゆんとする心こころを通して、この世よこに來こられたのです。

そのようにして人となられたイエス様も、実じつは生涯しょうがい、神様かみさまに従じゆう順じゆんなものとされました。イエス様イエスさまがそうなさつたのは、罪つみによって神様かみさまから離はなれて散ちらされた人々ひとびとを、神様かみさまのもとへ立たち返かえらせる為ためでした。人ひとの罪つみは神様かみさまの愛あいと慈いつくしみに對する疑たいいから始うたがまり、その人ひとが神様かみさまより世よの中に自分なを任じせたり、より頼たのんだりするように人ひとを誘さそいます。でも、その人ひとは自分じぶんがどうしてそうなつてしまつたのかを知らしずに生いき、結けつきよく局かみさま、神様かみさまから離はなれたまま罪つみの道みちを歩あゆみ続つづけるのです。それは神様かみさまにとつて何なんと悲かなしいことでしょう。ご

自分の愛によって造られた人々が滅びの道を歩むのは、創造主にとっては耐えられないことに違いありません。それで、神様はご自分の愛する独り子を遣わし、神様だけに従うことによる救いをお示しになったのです。確かに、イエス様は罪びとを赦し、病人を癒やし、苦しんでいる人を励ましたり、慰めたりされました。イエス様の御言葉と御業は、すべて神様の慈しみと愛の御心に基づいて行われ、その御心に従わずに行われたのは何一つありませんでした。その従順の姿は世の中に属している人々には受け入れ難いもので、むしろ、さげすまれるはずの姿でしょう。しかし、イエス様は神様への従順によって、世の中の力ではなく、神様の愛と恵みで強められ、その愛に生きる道を示されました。そこで、今日の第2朗読で、使徒パウロもそのイエス様の福音によってすべての人が強められることを言及しつつ、神様に従順であることによって全ての人が救われることをはっきりと教えたのです。

さて、第1朗読で預言者ナタンはダビデに「心にあることは何でも実行なさるとよいでしょう。主はあなたと共におられます。」と言いました。これはまるで、「主があなたと共におられますので、心にあることは何でもなさってもよいでしょう。」という風に聞こえます。それに比べてマリアは「主があなたと共におられます。」というガブリエルの言葉に対して、「私は主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」と答えました。マリアのこの答えは「主と共におられますので、私は主のものです。主の御心通りになさってください。」という風に聞こえます。それは何と素晴らしくて清い心でしょう。これこそイエス様の御体と御血の為の眞のチボリウムとカリスではないでしょうか。さすが、マリアは世界初めのカリス、初めのチボリウムであり、また、最初の聖体拝領者でした。今、世の中の様々な力、お金、知識、経験に従い、また、それを追い求めながら生きてきた人類は、今まで経験したこともない危機と向き合っています。こんな状況の中で改めて来られるイエス様を、私達はどのような心のチボリウムとカリスに迎えようとしていますか。イエス様の尊い御体と御血が変わらないようにとする為、チボリウムとカリスの内側は金でメッキします。それならば、私達の心や魂をイエス様の愛と神様への従

順^{じゆん}で完全^{かんげん}にするのは^ああたり^{まえ}前^{なか}でしょう。このミサ^{なか}の中で、私^{わたし}達^{たち}がイエス^{さま}様の^{しん}ための^{しん}真^{しん}のチボリウムとカ
リス^{こころ}となる^こことができる^{いの}ように、心^{こころ}を^こ込^{いの}めて祈^{いの}りましよう。